

2018年05月23日 1面

文字サイズ 小 中 大 印刷 

地域を興す－長大の挑戦・上／信頼できるパートナーと共に歩む

斜面から伸びる導水管とアシガ川
小水力発電所

建設コンサルタントの長大が2011年からフィリピン・ミンダナオ島北東部のブトゥアン市で主導してきた地域開発プロジェクトが新たな段階を迎えた。産業・地域振興に必要な電力と水を安定供給する小水力発電所と上水供給施設が完成。先行する精米、養鰻などの農林水産事業も軌道に乗り、次は地域産品を加工する工業団地の開発が視野に入る。「インフラを築き、産業を興し、雇用を創る」という民間主導の地域開発の最前線をレポートする。（編集部・富本伸一）

「これからが本当の意味のスタートだ」。永治泰司社長は4月30日、同市を流れるアシガ川上流に完成した小水力発電所を視察し、こう切り出した。

アシガ川小水力発電所は6月に試運転が始まり、長大が出資する特別目的会社（SPC）アシガ・グリーンエナジーが今後25年間にわたって運営する。発電容量は8メガワット。日本で2万世帯分の電力使用量に相当するが、加藤聡長大フィリピン社長兼経営企画本部財務・法務部長は「フィリピンの電力需要は日本の10分の1といわれ、実際は相当数の家庭の電力を賄える可能性が高い」と期待を込める。

同市では現在、将来の人口増と企業進出を見据え、タギボ川とワフ川での電源開発や水資源開発のインフラ事業が長大、現地最大手ゼネコンのエクイパルコ、地元企業のツインピークらが設立したSPCによって進む。アシガ川小水力発電所の運営の成否がこれから続くインフラ整備の着実な推進で試金石となる。

同市の開発事業で責任者を務める井戸昭典取締役兼常務執行役員は「開発時はエクイパルコが施工、長大は調査・設計・施工監理と技術支援、ツインピークが企業間調整などと役割を分担し、運営は出資を含め一緒にリスクを取る。1社だけで良い思いをしようという考えはない」と話す。

長大はエクイパルコとともに、過去に日本の大手ゼネコンで土木技術者として活躍し、ミンダナオの事業に精通したツインピークの高野元秀社長とパートナーを組む。高野社長はゼネコン勤務時代からエクイパルコと付き合いなど、関係も深い。加藤部長とは東洋大学大学院のPPPスクールで共に学んだ間柄で、高野社長が2社の橋渡しを担う。

かつて日本の政府開発援助（ODA）による公共投資で潤っていた時代もあったブトゥアンも、2000年代に徐々に低迷。建設市場の先行きに不安を覚えたエクイパルコのロニー・ラグダナ元社長（現ブトゥアン市長）に対して、高野社長は新市場開拓としてまちの発展に貢献しながら仕事を拡大しようとする、長大の試みを紹介した。

長大は昨年12月、ブトゥアンで展開中の地域開発が加速するとみて、マニラに現地法人・長大フィリピンを設立した。オフィスはエクイパルコのマニラ支社に併設され、その関係はすこぶる良好だ。ローカルゼネコンとの関係構築にとどまらず、地元の企業や行政を知り尽くし、地元調整などの多岐にわたる問題に対応可能な信頼できるパートナーをどう見つけられるかが、海外での地域開発では成否の鍵を握る。

閉じる

記事ID : 3201805230102

Copyright(C) 日刊建設工業新聞 記事の無断転用を禁じます